

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

カルメン・マルティン・ガイテと言葉

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Nakamachi, Chiho メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/998

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



氏 名 仲町 知帆

本 籍 三重県

学位の種類 博士（文学）

学位記番号 甲第30号

学位授与年月日 2012年3月23日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項に該当

【昭和28年4月1日文部省令9号】

学位論文題目 カルメン・マルティン・ガイテと言葉

審査委員 主査 神戸市外国語大学教授 福 嶋 教 隆

委員 神戸市外国語大学准教授 野 村 竜 仁

委員 神戸市外国語大学准教授 成 田 瑞 穂

委員 東京外国語大学教授 柳 原 孝 敦

1. 論文内容の要旨 28

2. 論文審査結果の要旨 30

1. 博士論文内容の要旨

本稿はスペインの作家カルメン・マルティン・ガイテ (1925-2000) の小説4点を中心に、「言葉 (palabras)」というキーワードを手がかりに分析することを目的とする。彼女が文学に親しみ始めたのはすでに幼い頃からだが、実際には文学と言うよりもむしろ言葉そのものの面白みに惹かれていたようだ。子どもがおもちゃ遊びを純粋に楽しむように言葉遊びを最大の喜びと感じ、最期まで言葉への信頼と愛着を抱き続けた。本稿で扱ういずれの作品にも彼女の言葉への情熱が溢れ出ている。彼女は、文学作品や書物に残された言葉の重みはもとより、人生という流れ去る時間の中で消え行く無数の言葉の価値もまた、ことのほか大切にしたと思われる。そしてその言葉の有り難さを、何より身近に感じていた文学、それも小説の形で、他者に語り伝えることを選んだようだ。書くという手段に頼ることなく私たちが意思疎通できたなら、そもそも書物など必要なかったはずだ、というのが彼女の本音である。それにもかかわらず、あえて書くことを、そして最終的に小説家の道を選び取ったことになる。そこに至る経緯も含め彼女の人生をたどることは、無限の可能性を持つ言葉の旅に同伴するようなものである。本稿ではその独特な言葉の旅を記録するとともに、彼女にとっての言葉についていくつかの面から考察する。

本稿は全部で6章からなる。言葉を探求するには当然、言葉以外のものも視野に入れる必要があるだろう。その意味で第1章では彼女の人生の歩みと著作品について概観する。作家は書くために生まれてきたとよく言われるが、彼女の場合は書くために人生を歩んだと言えるかもしれない。本稿ではそれぞれの時期において彼女が考え行ったことが、見事に作品に反映されていることを明らかにする。言葉の力を信じぬき、創作においてその癒しの効果を最大限に引き出すことに成功した背景には、言葉に対する強い働きかけが必要であったことを示す。

第2章では、主人公で語り手の独白が物語の大半を占める、言葉への賛歌を描いた1974年の *Retahilas* (『長話』) を扱う。この小説で彼女は、それまで培ってきたやや内的な幻想世界とはいったん距離を置き、現実を直視し、言葉と正面から向きあう試みに挑んだと考えられる。対話での聞き手の重要性を始め、語り手の心の吐露が熱心な聞き手に届くことから生じる癒しの境地など、対話をめぐる話が雑然と人物の口から語られる。読者に直接に語り聞かせるような筆致を分析することで、作者が作家としての使命感を意識し、生来のユーモアや冒険心を作品世界に浸透させていたことを明らかにする。

第3章では補完的に、彼女が歴史研究や文芸記事の執筆、童話や昔話の見直し、翻訳などに従事していた時期の著作三点に注目する。まず世界的名声を得た自伝的小説 *El cuarto de atrás* (『奥の部屋』) に見る作者の文学への思い、続けて、随筆 *El cuento de nunca acabar* (『果てしない物語』) に描かれる言葉へのこだわり、そして物語 *Caperucita en Manhattan* (『マンハッタンの赤ずきんちゃん』) に見る童話の役割に言及する。

第4章では、作者がとりわけ幼少時代に親しんだ言葉遊びの思い出が再現された小説 *Nubosidad variable* (『晴れたり曇ったり』) を扱い、言葉への興味や言葉のイメージに焦点を

当てる。流れ行く雲を人間の心に、神秘と儂さと美の象徴である蝶を言葉になぞらえる意味を探る。作者が蝶に対して抱いていた思いは、まさに言葉に対するそれと一致している。用い方によっては凶器にもなりうる言葉を、慎重に慈しむように、しかし同時に距離と敬意をもって眺めていたことを明らかにする。

第5章は小説 *La Reina de las nieves* (『雪の女王』) における言葉と記憶をめぐる精神世界に関し、作風に現れる文学観を構成や着想を手がかりに探った。物語に挿入された様々な引用から、作者の知的好奇心と独自の世界観を感じ取る。さらに、物語を支えている童話とロマン主義的感性について考察し、それらが創作の出発点であったことを導き出す。

第6章では小説 *Lo raro es vivir* (『生きることの不思議』) に織り込まれたパロディや引用、メタファーに関する思索が、物語世界にどのような効用をもたらしているかを探る。書くことに伴う精神的束縛と解放感、また、生きることをめぐっての不思議を中心に、作者から読者へ向けられたメッセージを明らかにする。第5章においても言えることだが、言動の主要素である言葉は、つねに動き続けるものであり、永遠に変化し続ける運命を背負っている。作者から離れた作品としての言葉の空間は、読み手の解釈によって何通りにも広がり、変容し続ける。そこでの現実世界との接触は、物語の文脈に自然な形で導入される引用によって可能になっている。引用されるテキストをたどれば、それらは芸術的用語や古典文学の本文、流行を反映した文化的事項など様々な分野に及んでいる。引用テキストの他にも人物の追憶、空想、言葉遊びや駄洒落が舞い込み、物語が中断するかに見えるときもある。無秩序で無駄な部分にこと欠かない現実の風景が、そのまま物語世界にも持ち込まれていると考えられる。現実と虚構の区別が曖昧になるような場面も少なくない。

このような物語世界を背景にして、不幸とは言えないまでもどこか満たされない心を持った人物が登場し、現代社会の一部を映し出すような孤立感やその他あらゆる葛藤と闘うというのが、彼女の作品世界の中心となっている。そしてこのような不安感をひと時でも慰め、癒すことができるのが、他でもない言葉の力であるということがいずれの小説においても強調されている。記憶の片隅に埋もれていた過去の言葉がふとした瞬間に蘇る感覚も、その力の作用によるものだと伝えている。

作家マルティン・ガイテの創作世界における言葉の力とは、時間も空間もともに超越するものである。言葉の力を伝えるのに結果的には小説という媒体に落ち着いたものの、それが話し言葉でも書き言葉でも、彼女の場合は構わなかった。ただ、私たちがともに心を伝え合うことによってのみ、生きる希望を見出すことができるということを伝えようとしたのである。それを可能にしたのは当然ながら言葉であった。動物と人間とを隔てる言葉というかけがえのない伝達手段を今一度見つめ直すことが、現代社会を生きる私たちにとって大切なことだと、彼女は著作品を通して主張している。また、言葉はつねに変化し続けるものであり、私たちが生きている限り切り離して考えることはできないとも伝えている。彼女にとって言葉とは、人生の伴侶のようなものであったと結論づけることができる。